

二月十八日

今朝三時まで室内原稿。本日校了なのに何を書くのかを決めたのが昨夜の二十三時過ぎだったのだから何をか言はんやである。藤森照信の故郷から来たデツカイ丸太の事を書いた。深夜三時に室内にFAXと書いてよもやと思いつながら電話したら長井が頑張っていた。すまねエと思った。×日が過ぎないと書けないというクセは、しかしもう直らないだろうな。十六時半白井総長と会う。十七時半シャープ大河原本部長。

二月十九日

午前中中縄計画の基本方針をまとめる。本格的にハードな「箱」と呼ばれる建築世界から一歩踏み出すプロジェクトにした。生活空間生命維持システムのデザインという事になる。経営システム、機械B（医療ロボット）のメンバーと組んで大きなスケールのプロジェクトを組立てるつもり。白井早大総長の沖縄振興審議会会長就任も内定しているので、沖縄の為に役に立てるようになるだろう。今十七時前ANAN89便で沖縄へ飛んでいる。隣のシートでは結城登美雄さんが眠っている。GAHOUSESのプロジェクトに中縄計画のエキスになるようなプランを出す積り。そのスケッチをする。このアイデアは北海道でも成立するな。ヘレンケラー塔の増築セミナー棟や六花亭への提案にも適用してみよう。一時間半ほどスケッチに没頭する。十八時五〇分

頃那覇空港着。国建で打ち合わせ。食事後名護へ。二三時喜瀬ビーチホテル。結城さんとビールを飲んで雑談。雑多でしかなかった考えが少し焦点を結び始めてきた。

二月二〇日

六時半起床。六〇才になって入学できる学校。六〇才以上の方々で運営する会社。コミュニティのエリアにある程度の集団で自給自足可能な農園の実現。ハイテック介護カー<sup>etc</sup>、結城さんと雑談から生まれたアイデアである。これだけで結城さんを沖縄に呼んだ価値がある。今日は幾つか表敬訪問した後百才のおばあちゃんの聞き書きから本格的なスタディを始める。

八時四五分ホテル発。九時過北部広域市町村圏事務組合訪問。十時三〇分名城大学訪問。十一時半大宜味村笑味（えみ）の店金城笑子さんインタビュー。十四時奥島ウシさん菊枝さん母子訪問。ウシさん百才。菊枝さん（七四才）のお話を聞く。百才の人間に会うのは初めての事だ。が、会って、その見事な存在感に圧倒された。私なんかは百才から見れば高尾山程度の低いジャリ山だ。八十才まで魚売りをしていたそう。この人物の見事なのは全く事実しかしゃべらない事だ。アリのママの言葉が連続している。私や結城さんの言葉はチョッと抽象的で事実から浮いている。途中でそれに気付いて私はインタビューを止めて、ただただ聞き役に廻った。なにしろこの大人物は良く仕事する人であった。二二才で鹿児島に魚売りに行ってから百才の今まで一途に仕事してきた。今でも天気が良ければ畑に出ているそう。友達が皆いつかしまつて時にあっちに行きたいと思う事があるけれど、それでも畑に行きたいと言う。そう言えば、先ほどの笑味の金城笑子さんのインタビューの合間に、道をへだてた畑に行ったら、金城弘安

さん（七四才）に会った。畑仕事を黙々とやっていた。八十四、五はもちろん、九六才も畑仕事は現役だと言っていた。畑と言っても本当に猫の額の三〇㎡せいぜい五〇㎡程度のもので、猪が食い散らしにくるので対応が大変ならしい。その畑でウシさんは倒れるんじゃないかと菊枝さんは言った。インタビュアーの間、菊枝さんはずっと敷居をへだてた次の間で正座して、母ウシさんを見上げていた。七十四才にして娘のママなんだ。なんだかウシさん母子の話を聞いているうちに、泣けてきたな。自然に。山本夏彦のきらいだったアイダミツオじゃないけれど、人間百才まで生きたら凄いモノになるんだなと了解した。ウシさんは鉄人ルーターズだ。十六時大宜味村喜如嘉。インタビュアー相手のじいさんたちはまだゲートボールの最中だったので、芭蕉布の工房を見学。十七時平良仁松さん（九三才）稲富吉雄さん（八五才）福地善次さん（七六才）稲福肇さん（七二才）のインタビュアー。ジイさん達はウシさんに比べると皆可愛い。皆さん大工あがりの方々だった。今までは旅に出て仕事をしていたが、これからは若い人に仕事がないのが心配だと言う。平良さんが毎朝犬を連れて散歩に出て、流木を拾ってきて何か作っていると言うのでお宅にうかがった。庭や納屋に沢山のオブジェが作っており、小さなシユバルの趣あり。元氣そうにしているが、九十過ぎの平良さんには一人の辛さが押し寄せていたな。でも平良さんのミニシユバル宮殿にかがえて良かった。十九時過名護の喜瀬ビーチホテルに戻る。今日のまとめのミーティングと明日の段取りをして食事へ。

二月二日

朝四時半起床。二〇日のメモを記す。六時まえに再び寝る。七時半起床。沖縄の老人達と比べると俺は卑弱だ。体をもっと使う

ようにしなければ。九時HOTEL発。十時頃東村にて三名インタビュアー。私は高良輝忠さん（九八才）おしゃれな老人であった。後で聞けばコロナの歌手体験もあつた人との事。本人はそんな事おくびにも出さなかった。第二次世界大戦の折、高良さんは東村の戸籍係になっていたという。戦前、戦後の境目で戸籍が全て消失して、その失くなった記録を復元するのが高良さんの仕事だったと言う。謂わゆる東村住民の記録の復元係であつたと言う事だ。毛筆で一つ一つ全て記し直したらしい。それで東村の人々の歴史を全て把握してしまつた人物だ。事実は小説よりも奇なりと言うが、まさにその通りの人物であつた。オシャレで少しばかりのテライもあつて素敵な人物であつた。十三時名護市に戻る。岸本市長と面談。三〇分程二度目の挨拶であつたが、和やかで良かった。挨拶は人情の極北だな。市長は早大出身で、白井総長が沖縄振興審議会会長に就任することの内定を伝えた。要するに私がこのプロジェクトに力を尽くすというのを伝えたのだ。

その後再び北へ。十六時頃国頭村安田、古堅昇さん（七八才）宅。聞き書き。弟さんは衆議院議員古堅実吉氏との事。安田はまことに平穏なところだった。二〇時過名護に戻り、食事。二三時過HOTELに戻る。今日も良い一日であつた。

二月二日

七時起床。今日も快晴、風も無く名護の海は静まり返っている。第一回の沖縄聞き調査は四日目の最終日。朝食後チエックアウトして九時ホテル発。北へ。一〇時頃国頭村浜へ。木下フジさん（八四才）大城ミヨさん（七七才）島袋ミエさん（七六才）インタビュアー。にぎやかで元気なオバさん達だった。「一人でも思いにふける事は病を得るのと同じ」だ。ユンタク（おしゃべり）は

アゴの運動だけれど健康には効能がある旨を力説された。木下さんは午後につかがう奥の生れで、兄さんも教員であったとの事。その給料は二六〇円でタバコ代と同じであった由。昼頃インタビューを終え再び北へ。沖縄最北端の辺戸岬へ。岬のレストランで決して美味とは言えぬ沖縄ソバを喰う。アメリカ人がグループでバイクで乗りつけていた。塩味がきつくて喰える代物ではなかった。十三時過、沖縄最北端の集落「奥」へ。資料館で宮城正男さん（九〇才）に会う。まだまだ美しさの残る集落だった。海太郎の「品格のある町づくり」晶文社が資料館の本棚にあり、この集落に勉強好きが多い事が知れる。インタビューは結城さんに任せ、奥集落の実見に出た。二月だと言つのにカンカン照りの真夏の陽の光が集落に溢れ、小路には異常な静謐さが溢れ返っていた。私の七、八才の岡山の故郷にあった抜けるような静けさと酷似していた。好きなんだナアこの雰囲気は。海に面した奥、中・小学校はデザインは悪いが、その位置、大きさ共に良かった。この学校が奥集落では大きさ、風格共に一番であった。それがいい。人材育成に集落の将来を賭けているのが歴然とわかる。スケッチをして一時間後に資料館に戻る。

インタビューは良い結果を得たらしく、やはりこの奥集落が沖縄の共同店舗の始まりである事、相互扶助のシステムによっていた事が判明したようだ。三時間かけて那覇に戻る。二〇時五五分のJAS最終便で東京へ。只今二三時三五分東京駅より中央線車中。深夜なのに車中は人がいっぱいだ。沖縄の奥集落の静けさかもう夢のように思えてしまう。

二月二三日

○時半世田谷村に戻る。二時前前後不覚もなく眠る。十一時半

まで眠った。今日は日曜日だが昼過ぎには地下スタッフの仕事に来るので、対応しなければ。十三時地下へ。一、三指示する。十六時前原宿表参道八丁森ビル5Fで長女徳子が何かやると言うので家内と出掛ける。ユタ州のインディアン居留地の核廃棄物問題について徳子の二〇分ほどのレクチャーを聴く。二〇分では伝えられぬ内容である事は解った。ブッシュ政権に対する見解等話の処々に彼女の反体制の姿勢がにじみ出ていた。将来苦労するだろうが満足であった。十七時過世田谷村へ戻る。安藤達の仕事を見て十八時前修了。皆を帰した。何せ今日は日曜日なのだ。少しは休みなさい。

十八時半家内と二人だけの食事。

夜、新潮社より送られてきた山本夏彦の「一寸さきはヤミがい」読む。拾い読みしていたら、止められなくなって熟読した。「一無名選手死す」山本春樹さんは山本夏彦の実の兄で、その兄上の死を書いたのが私には良かった。夏彦さんの本性（あつたのか無かつたのか知らぬが）が少し計り視えた。山本さんの実物は居なくなつたがどうやら彼はやはり生きてるぜ本当に。知り合い、友人の幾たりかを失い、私もようやく「別れ」というものの実体に触れることができるようになったのかも知れぬ。マ、それ程偉そうな事言つのも野暮だけれど。

毎日新聞より昨年の座談会「阿弥陀が来た道」ゲラが送られてくる。当然佐藤健の本として出版されるようだ。手を入れる事なく送り返す。